

地域復興・生活応援

第19号  
1995.10.11

# 救援ニュース

都市生活現地救援本部  
西宮市津門西口町7-3  
電話：0798-36-6679

## ♡現地救援本部♡ INFORMATION

♣新生伊丹復興祭♣

10月29日(日)

於：伊丹小学校

詳しくは現地救援本部まで

TEL 0798-36-6679

### Q & A

## ‘ふれあいセンター’って何？

**Q：ふれあいセンターってどこに建っているの？**

A：比較的大規模な仮設住宅の敷地内にあります。当初は100戸規模の仮設住宅に一つのセンターが目安でしたが、現在はもう少し小さい規模の仮設住宅にも建設が予定されています。建物の大きさは約100㎡の平屋建てで、6畳の和室と相談室、30畳ほどの洋室があり、トイレと給湯室がついています。兵庫県内でおおよそ百数十棟のふれあいセンターができる予定です。なお建物自体は県が建てたものです。

**Q：どんな目的で建てられたの？**

A：県の「ふれあいセンター設置運営要綱」には、「阪神淡路大震災により、心身両面にわたって大きな打撃を受けている仮設住宅に住む高齢者等に対し、ふれあい交流を通じて心身のケアを行い、高齢者等の自立を支援するとともに、コミュニティ形成の場やボランティア活動の拠点等となる場を提供するため、ふれあいセンターを設置する」とあります。

要するに、仮設住宅に住むお年寄りや障害者が、不自由な生活環境の中でできるだけ楽しく快適に暮らしていけるように、様々な人が集まることのできる集会所をつくらう、ということです。

**Q：管理運営は誰がやるの？**

A：県は建物だけつくって、運営は各市町に委せています。要綱では、「市町が募集・選考した民間の支援組織が管理運営する」となっています。

**Q：「民間の支援組織」って具体的には？**

A：仮設住宅の自治会、社会

福祉協議会、各種ボランティア団体・個人がその中心です。鍵は自治会が管理しているところが多いようです。とはいえ、自治会がまだできていない所もあり、運営がスムーズに行っていない場合もあるようです。

**Q：すでに建ったふれあいセンターでは実際にどんなことが行われているの？**

A：日常的には、自治会の会合、ボランティアグループ主催の茶話会などのイベント、料理教室・手芸・囲碁・将棋・カラオケなどの文化活  
(裏面へ続く)



喫茶コーナーに集まる常連客ら—尼崎市東園田町2の東園田ふれあいセンターで  
(毎日新聞 10月16日付朝刊より)



動、などが行われています。また、談話室つまり「井戸端会議」の場としても貴重なようです。

**Q：「都市生活」はふれあいセンターとどんな関わりを持っているの？**

**A：以前にこの救援ニュース**

でもお知らせしましたが、ボランティア山形の布施光津子さんと知人の画家前田春治さんから贈られたパステル画を十数カ所のふれあいセンターに寄贈しています。この件についてはもっと多くのふれあいセンターに絵を寄贈してい

くことになっています。

明石市や尼崎市ではすでに組合員がふれあいセンターの運営について自治会と話し合いをもち、伊丹市では社会福祉協議会と協力しています。

また、組合員さんの中には個人または有志のグループで近隣地域のふれあいセンターにかかわっている人もいます。救援本部ではこのような個人やグループを今後とも支援していきます。

なお、ふれあいセンターで何かやってみたいと思われる方、ふれあいセンターの情報を知りたい方は、お気軽に現地救援本部まで御連絡ください。

ふれあいセンターに寄贈されるパステル画＝西宮市津門西口町の「生協都市生活」現地救援本部で



10月3日付朝日新聞（朝刊）より

(前号から続く) 九州生まれ、九州育ちの私にとって、現地救援本部で過ごしたこの一ヶ月間は毎日驚きの連続でした。国道2号線の渋滞、爆撃を受けたような長田の焼け跡、山麓バイパスのエンドレスなトンネル、阪神高速湾岸線からの夜景等々、目に入ってくる光景だけでも「うーむ」、「ほほー」と感嘆の声を漏らしました。人々に会う度にその絶大なる関西弁パワーに「いやいやいやー」と思わずお茶を濁して、にっこりその場を立ち去る……。

しかし、こんな出来事は実はそんなに大したことでは

なかったということを体で覚えるまでに時間は掛かりませんでした。皿が舞う、ビール

現地救援本部新スタッフ紹介  
グリーンコープ連合

ジュニアこと  
かわしま としひて  
河嶋 敏秀

瓶が飛ぶ、一升瓶が転がる……。そうです、夜な夜な繰り広げられる夜の‘シンポジウム’の始まりです。まどろみの誘惑の中、必死に意識をつなぎ止める私の眼前に繰り広げられるめくるめくような地獄絵図、生協談義に種をま

き、支援活動に肥料をやり、河内弁講座につぼみを付け、落ちのない落語でで実を結ぶ。昼は支援活動に汗を流し、夜は試練活動に励んだ私も、体重5kgのパワーアップとともに、今や立派なスタッフに成長し、夜の‘シンポジウム’で熊本弁講座を開講するまでになりました。私の成長に尽力してくださった、スタッフ、都市生活職員の方々、今や家族になってしまったパパン川島氏、ママ前川氏、ニーニー角田氏、組合員の方々、など各方面に感謝しつつ、さようなら。